

一栄谷の 異見私見



夏休を兼ねたこの8月中旬、秋田県・山形県の農山村を回ってきました。折から続けばまに台風が襲来、その影響で豪雨が断続的に降る間を縫って、幸運にも秋田県の横手市では花火大会、そして同じ秋田県の羽後町では日本三大盆踊りの一つとされる西馬音内(にしまね)盆踊りを堪能すると同時にその爆発的なエネルギーを感じさせられました。

横手市では打ち上げられる花火を背景にして「扇形舟繰り出し」が行われる。木で舟の骨組みを作ったものに稲わらを巻いて形を整えた扇形舟を横手川の河原で奉納して御盃を送る儀式が行われた後、舟は近くの蛇の崎橋に移動して橋の上で勇壮にぶつけあう。市内の町単位で作られた舟14艘が勢ぞろい、それぞれ20名前後の力持者が舟に紐をつけて引っ張ったり神輿のようには拍いだりし、山車と同じように走り回る。ぶつけあいは、笛や太鼓がにぎやかに囃す中、2艘の舟の舳先を突き合わせ見合っただうそで、合図とともに船上の舳先近くに上って指揮をするリーダーの掛け声に合わせて

勢いをつけてぶつけあうが、舳先を突き合わせた舟は次第にせり上がるかたちとなり、押し合う2艘の前進する方向がずれるとせり上がった舟は墜下して地面に激しく叩きつけられる。前進する方向がまっすぐ直線に乗るはずなのに、場合によっては60度以上にも持ち上がる。高くなるまで押し合っただうそで一転してそこから墜下するさまと地面を

祭りに込められた 祈りと怒りに耳を

叩きつける音はまさに迫力満点。14艘がそれぞれに相手を突きながら何度も何度もぶつけあいが展開される。西馬音内の盆踊りの最大の特徴は端唄(はなうた)と呼ばれる、何種類もの絹布をはき合わせた衣裳を身にまとって踊るところにある。藍染の浴衣で踊る人たちもいる中で、黒っぽい衣裳に赤をはしめする色柄の端唄が

映えなんともなまめかしい。また踊り手は両端が長目の編み笠をかぶるか、「ひこぎ頭巾」といわれる黒い布を袋状にして、首が見えるように目穴が開けられているものをかぶるかで、踊り手の顔は見えない。こうした独特のいでたちで、総じて男っぽく野趣に富むお囃子にあわせて、しなやかな手振りと優雅な足さばきでゆるやかに流れるような踊りが繰り広げられ、華やかで艶っぽく、また怪しげでもある独特の雰囲気を感じ出される。以前は明け方まで踊りあかしたそうだが、今では短縮されたとはいえ、夜の1時まで踊りは続けられる。

東北では青森のねぶた、秋田の笠灯、仙台の七夕の三大祭に限らず、各地に歴史と伝統を受け継いでのロカール色豊かな祭りが残り、続けられている。祭りは五穀豊穣の祈りとその地域の持つエネルギーを象徴する雄叫びでもあり、東北でのTPPへの反対や先の参院選での自民圧勝への異議申し立てとも連動しているように感じられない。そこには寒冷の地に水田を開いてきた汗と涙や、長く厳しい冬を乗り越えてきた東北の農民の祈りや怒りが響められている。祭りは政のこころにつづる。安倍政権は東北の農民の声を軽視することは絶対に許されない。あくまで地域へのこだわりを尊重していくことが基本だ。(農的社会学サイエンス研究所代表)